

私たちを養う神

[エゼキエル書 34 章 7～16 節]

「それゆえ、牧者たちよ。主の言葉を聞け。わたしは生きている、と主なる神は言われる。まことに、わたしの群れは略奪にさらされ、わたしの群れは牧者がいないため、あらゆる野の獣の餌食になろうとしているのに、わたしの牧者たちは群れを探しもしない。牧者は群れを養わず、自分自身を養っている。それゆえ牧者たちよ、主の言葉を聞け。主なる神はこう言われる。見よ、わたしは牧者たちに立ち向かう。わたしの群れを彼らの手から求め、彼らに群れを飼うことをやめさせる。牧者たちが、自分自身を養うことはもはやできない。わたしが彼らの口から群れを救い出し、彼らの餌食にはさせないからだ。

まことに、主なる神はこう言われる。見よ、わたしは自ら自分の群れを探し出し、彼らの世話をする。牧者が、自分の羊がちりぢりになっているときに、その群れを探すように、わたしは自分の羊を探す。わたしは雲と密雲の日に散らされた群れを、すべての場所から救い出す。わたしは彼らを諸国の民の中から連れ出し、諸国から集めて彼らの土地に導く。わたしはイスラエルの山々、谷間、また居住地で彼らを養う。わたしは良い牧草地で彼らを養う。イスラエルの高い山々は彼らの牧場となる。彼らはイスラエルの山々で憩い、良い牧場と肥沃な牧草地で養われる。わたしがわたしの群れを養い、憩わせる、と主なる神は言われる。わたしは失われたものを尋ね求め、追われたものを連れ戻し、傷ついたものを包み、弱ったものを強くする。しかし、肥えたものと強いものを滅ぼす。わたしは公平をもって彼らを養う。」

[1] 牧者の責任

新生讃美歌では歌詞が変わってしまっているのですが、有名な讃美歌で「飼い主わが主よ」という讃美歌がありますね。この歌が好きだという方は多いのではないかと思います。私も好きな歌です。以前の歌詞の第1節はこうなっています。
「牧主(かいぬし)わが主よ まようわれらを 若草の野辺に 導きたまえ
われらを守りて 養いたまえ 我らは主のもの 主に贖(あがな)わる」

この歌は一つには、先ほど交読した詩編 23 編の言葉ともふかく関係があると思います。「飼い主」というのは羊飼いのことであり、私の神様は羊を愛する羊飼いのようなお方で、この方は私を若草の野辺＝つまり牧草豊かな緑の牧場に導いて下さる。私には欠しいことがない、と深い信頼を歌っています。

そしてこの神様はただ一緒にいてくれるというだけではなく、「われらを守りて養いたまえ」とあるように、**私たちの命を支え、また、養って下さる**というのです。言い方を変えれば、私たちが飢えないようにして下さる。実の親のように養って下さる、というのですね。

もし実の親が自分の幼い子供に食事をまともに与えなかったらどうなるでしょうか？ ネグレクト、育児放棄。そのようなことでどれほど多くの子どもたちが生死の間を彷徨っていることか。それは、親子関係が破綻していると言わなければなりませんね。子どもはどうすることも出来ません。「羊」は「羊飼いを必要とするのです。その「養い」がなければ、羊は、羊であることすらできなくなってしまいます。「羊」にとって、「羊飼いが愛ある羊飼いであるのか、或いは逆に羊を見殺しにしても平気な羊飼いであるのかどうかは大問題です。

それが、今日の**エゼキエル書 34 章**が告げていることだと思います。今、イスラエルの民はバビロンに捕えられてしまったり、或いは他の外国にも離散させられたりしてしまっています。エルサレム神殿も陥落してしまっただけという知らせも届き、これから先のことなど絶望的な状態にあったのです。なぜそのようなってしまったのか。それについて、主なる神様は、あなたたちの国・イスラエルの「**牧者＝羊飼いの責任**」が大きいのだ、と言っているのですね。

[2] 私たちを真に養う方

先ほど**エゼキエル書 34 章の 7 節**以下を読んで頂きましたが、そこに至る**1～6 節**には、イスラエルの牧者に対する容赦のない、辛辣な言葉が語られています。お読みします。「**主の言葉がわたしに臨んだ。「人の子よ、イスラエルの牧者たちに対して預言し、牧者である彼らに語りなさい。主なる神はこう言われる。災いだ、自分自身を養うイスラエルの牧者たちは。牧者は群れを養うべきではないか。お前たちは乳を飲み、羊毛を身にまとい、肥えた動物を屠るが、群れを養おうとはしない。お前たちは弱いものを強めず、病めるものをいやさず、傷ついたものを包んでやらなかった。また、追われたものを連れ戻さず、失われたものを探し求めず、かえって力づくで、苛酷に群れを支配した。彼らは飼う者がいないので散らされ、あらゆる野の獣の餌食となり、ちりぢりになった。わたしの群れは、すべての山、すべての高い丘の上で迷う。また、わたしの群れは地の全面に散らされ、だれひとり、探す者もなく、尋ね求める者もない。」**

「**災いだ、自分自身を養うイスラエルの牧者たちは。牧者は群れを養うべきではないか**」とありました。国の政治・まつりごとを行う者は、彼らとその国民を「**養う**」

責任があるのですね。いきなり自己責任だ、或いは周りの者たちの互助・共助を求めなさいというのは、政治の放棄だと思います。神様は、「国」という組織とそのリーダー（牧者）を、その国民を正しく治め、養うために用るために立てられるのです。神様の委託ですね。ところが人間はその国家を私物化してしまうという訳です。そのような国では、民がむしろ路頭に迷うことになってしまいます。

神様、それはあなたが人間を買いかぶりすぎてはいませんか？ 人はどこ迄も愚かなんですから、あなたは人間に期待するのは間違いですと、私たちは言うのでしょうか？ でも、それは開き直りだと思います。今の言葉で言えば「逆ギレ」に過ぎないのではないのでしょうか？ 神様は人間に愛想を尽かし、その国家や人々を滅ぼすことも出来るお方なのです。けれども神様は人を滅ぼしません。悪人にも「あなたがたは立ち帰って生きよ」と語りかけておられるのです（18章、33章）。私たちはどこかで強い神様を期待します。しかし、もしも「裁き」だけがあるならば、国家のリーダー（牧者）はおろか、国民（羊たち）も生きられなくなってしまうのです。

そこで、主なる神様が取られようとする道は、国家も国民も生きる道です。9節以下をお読みします。

「それゆえ牧者たちよ、主の言葉を聞け。主なる神はこう言われる。見よ、わたしは牧者たちに立ち向かう。わたしの群れを彼らの手から求め、彼らに群れを飼うことをやめさせる。牧者たちが、自分自身を養うことはもはやできない。わたしが彼らの口から群れを救い出し、彼らの餌食にはさせないからだ。まことに、主なる神はこう言われる。見よ、わたしは自ら自分の群れを探し出し、彼らの世話をする。牧者が、自分の羊がちりぢりになっているときに、その群れを探すように、わたしは自分の羊を探す。わたしは雲と密雲の日に散らされた群れを、すべての場所から救い出す。わたしは彼らを諸国の民の中から連れ出し、諸国から集めて彼らの土地に導く。

「わたしは自らが、彼らの世話をする」とありました。これは画期的な神の宣言です。もう居ても立っても居られないので、王やリーダーに代わって、つまり人間に代わって、神様ご自身が養う、責任を取ると乗り出し、言い切っている。

少し飛んで 16 節にはこうあります。「わたしは失われたものを尋ね求め、追われたものを連れ戻し、傷ついたものを包み、弱ったものを強くする」。これまで受けたあなたの傷も私が包むよ、そしてあなたを支えるよ、と言っておられます。

そしてさらに、23 節にはこうあります。「わたしは彼らのために一人の牧者を起こし、彼らを牧させる。それは、わが僕ダビデである。彼は彼らを養い、その牧者となる」。このダビデとは一ダビデも羊飼いであり、また王でありましたけれども一真の牧者ということです。私たちは知っているではないですか！ 私たちの傷も

本当に包み、また罪・過ちも赦して下さる愛に満ちた救い主を！ 私たちに、「ご自身の命」というまことの食物を与え、私たちを日々養って下さるお方を！ 主イエスをです。

[3] 羊のために命を

私はもうこれでもう 5 回目になるのですが、東松山市の都幾川のほとりに立つ、原爆の図丸木美術館に先日行ってきました。今回行って見て私は思ったのですが、なぜ丸木位里さん・俊さん夫妻はあの連作の原爆の図を屏風絵にされたのかと思いました。縦 1.8 メートル、横 7.2 メートルです。考えられ得る最も大きなキャンバスです。小さな空間には置くことが出来ません。それは大広間、公の場に置かれることを想定されているのです。それは原子爆弾による人間破壊の現実を世に遺し、世に問うためです。だからそれは小さくてはいけません。絵に大きく描かれた人は殆ど実物大です。そして、そこには戦争を止めることが出来なかった自分たちの心とも向き合っている、その意味もあるのだなと思いました。

一つ、私は今回その中に「母子像」と題する作品が特に目に留まったのです。この絵に関しては墨の部分が少なく、殆どを丸木 俊さんが書かれたということですが、投下直後の光景を描いた作品です。着る物を全部炎に焼かれ、自らも全身炎に包まれて、しかししっかりと立っている女性の姿。そして、その胸元には自分の腕の中に裸の赤ん坊が抱かれています。丸木さんは文章を記しています。「母は死んでいるのに、子供が生きているという、そんな姿をたくさん見ました」。

私は主イエスを思い起こさずにはいられませんでした。「わたしは良い羊飼いです。良い羊飼いは羊のために命を捨てる。」(ヨハネ 10:11)。このお方が、炎に包まれて下さったのです。それが十字架です。私たち羊のためです。彼が焼かれ、その腕に抱かれている私たちが生き続けるためです。羊はそうにして守られ、養われているのですね。「神は愛である」とはそういうことです。たとえ貧しかろうが、健康の問題を抱えていようが、この愛を頂けば、私たちの心は、魂はどん底には陥りません。いや、むしろ「われ、欠しきことあらじ」(詩編 23:1)とさえ言うことが出来る。それは、主イエスが私たち一人ひとりを、内側から生かし、養って下さるからです！これは奇蹟です。そしてこの愛はいつまでも絶えることがないのです。「死の陰の谷を行く時」もです(詩編 23:4)。このあとに行う主の晩餐式を通してその愛を頂きましょう。

お祈り致します。